

性的自己決定と性経験の関連性について

田原歩美

福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：性的自己決定，性経験，性意識，性行動

はじめに

近年、性行動の低年齢化や活発化にともなう、10代の人工妊娠中絶や性感染症の増加、恋愛中のカップルの支配・従属関係によるデートDV、性関係の多様化に即応しない性的マイノリティへの偏見など、性にまつわる問題は多様である。その原因のひとつとして、性に対する正しい知識を有していないことがあげられる。若者の性に関する相談相手や情報の入手経路は、友人やマスメディアが多く、性に関する情報の入手は容易になってきている（忠津・梶原・篠原・長尾・進藤・新山・高谷，2008）。しかし、マスメディアによる情報は興味本位のものが多く、正しい知識ばかりでないにも関わらず、若者たちは情報をうまく取捨選択できずにいる。そのため、若者たちは、友人やマスメディアの情報に翻弄され、性に関わることを自らの意思で決定できず、自らの性と他者の性を物象化することによる性の商品化、性的な関係における暴力の被害と加害、性にまつわる多くのタブーや偏見の再生産など、さまざまな問題を抱えていると考えられる（青野，2006）。

特に、若者間の妊娠や人工妊娠中絶など、女性の性に関する問題は社会問題として取り上げられることが多く、今野（2003）は、大学生に避妊に対する意識と知識の調査を行った結果、避妊に対する意識は高く知識も持っているが、相手任せになっている面が多く、確実な避妊行動をとっているとは言いがたいことを指摘している。また、曾我部・大井・岸・早川・高村（2000）は、性行動から中絶に至る前の避妊に女性自身が自覚を持ち、健康に関する管理能力や自己決定能力を高め、望まない妊娠を避け、繰り返さないための自己決定と避妊行動がとれる機会、動機づけとなるような援助が必要であることを主張している。このように、妊娠や中絶に関することは、女性に焦点が当てられ、子どもを産み育てることが女性の役割であると捉えられることが多いが、妊娠や中絶は女性だけの問題ではない。妊娠は女性と男性の双方に責任があり、男性は「孕ませる（産ませる）性」であることを自覚し、自己の性的衝動をコントロールしたり、相手の自己決定権を尊重するなど、男性自身の性的自己決定も必要であろう（沼崎，2000）。

また、若者同士のカップル間で問題視されているデートDVについても、世間の関心が高まりつつある。DVとは、広義の意味では家庭内でおこる暴力のことであるが、狭義の意味では配偶者間や恋人間でおこる暴力のことであり、身体的暴力、精神的暴力、性的暴力、経済的支配などさまざまな暴力がある。近年は、一般的に狭義の意味でのDVが用いられており、2001年にはDV防止法が施行され、それまで潜んでいた家庭内暴力、とりわけ、夫婦間の暴力が顕在化されてきた。内閣府の調査では、配偶者による暴力の被害経験は女性24.9%、男性13.6%であることが明らかになっており、その被害のほとんどは女性であることが多く、重要な社会問題となっている。しかし、DV防止法には、配偶者間の暴力にのみ焦点が当てられており、婚姻関係の有無を前提としているため、交際のパートナーに対する暴力に対して法は適用されない。

小泉・吉武（2008）は、青年期男女におけるデートDVに関する認識について調査した結果、男女ともに被害者にも加害者にもなりうる可能性があり、DV神話に関する思い込みがDVに対する対応や認識を遅らせている可能性を指摘し、DV、デートDVに関する意識改革や正しい知識を深めることが重要であることを示唆している。また、山口（2004）は、女性差別を温存し、女性の自立を阻む社会の仕組みを変えることや、ジェンダーバイアスに基づく人々の意識を改めることなしにデートDVの根絶はないと述べ、伊田（2007）は、デートDVの被害者は暴力を愛と勘違いして別れられないという傾向があることを指摘し、親密な関係の構築と自己防衛との両立

が重要な課題だと考えられる。

そこで、思春期にある若者たちのリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（以下、リプロ・ヘルス/ライツ）に基づいた性教育の重要性が主張されている。リプロ・ヘルス/ライツとは、「人間の生殖システム、その機能と（活動）過程のすべての側面において、単に疾病、障害がないというばかりでなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態にあり、性に関することを自ら管理し、自由かつ責任を持って決定する権利」という概念である（柘植，2000）。日本の現状は、リプロ・ヘルス/ライツの根幹にある「女性の自己決定権」という概念が理解されておらず、生殖やセクシュアリティにおける問題や困難を抱えた人々が自己決定する状況を保障するための制度や、「自分のことを自分で決めてもいい」と考えられるようになる人的なサポートが必要なのである。

しかし、性に関する問題は、女性の性に関するものだけではない。近年では、性同一性障害や同性愛といった性的マイノリティの人権を守る立場から、性的マイノリティの社会的認知度や関心も高まっている。一般にマイノリティは偏見や差別の対象になることが多く、対人的にも経済的にも社会の中で周辺的な地位に甘んじている。そのため、カミングアウトをするのが困難であり、ますます偏見を増大させている（石丸，2004）。杉山（2006）は、同性愛者である高校生の自己形成過程について調査を行い、同性愛の高校生らは情報アクセスを、学校外部にしか求められない状況にあり、問題予知力を備える性的自己決定能力を育むことが保障されずに性的自己決定を迫られることを示唆している。また、和田（1996）は、同性愛に対する態度を調査し、男性は女性よりも同性愛に否定的であり、社会的容認度が低く、同性愛者と心理的に距離を置いていることを明らかにし、石丸（2008）は、同性愛に対する態度についてより詳細な調査を行い、同性愛に対して、肯定的な態度であるのは、女性で、性的マイノリティの知り合いがおり、固定的な性役割にとらわれない考えをもった人で、状態自尊感情の高い人であることを明らかにした。性的マイノリティの人々のように、性役割に縛られない多様な性の在り方を理解し受容することは、自己の性について問い直し柔軟な生き方や関係性を考える機会になるだろう（上野，2008）。

このように、性に関する問題は多面的であると同時に、それぞれの問題には性的自己決定能力の必要性が問われている。性的自己決定とは、性（生殖と関係した性だけでなく、生殖を目的としない性も含む）に関わる事柄について自らの責任で選択し決定できることである（東，2008；中里見，2007）。性行動や性意識は、自分自身のものであり、自分で培っていくべきものである。自分自身のからだや心に関する性的変化について理解することや、自分の性行動をどのように管理し、自分がどのように性と生について考え、決定していくか、そのすべての決定権は、自分自身にある。つまり、性に関することについて、誰かに合わせたり従ったりするのではなく、自らが考えて決定し、行動するために、性的自己決定能力が必要なのである。

草野（2006）は、自らの性を自己管理し決定すると同時に、相手との関係をよりよくするためのコミュニケーション能力を高めることで性的リスク対処への意識が高まり、実際にパートナーを得て、セックスの関係を持つことは、性的魅力に対する自信を高め、望まない妊娠や性感染症など性的リスクの認識や相手に対する認識を促し、リスク対処への積極的な態度や自信を育てることへ繋がることを明らかにしている。また、臺・荒賀（2006）は、性的なパートナーとの会話は、お互いの性の情報伝達の機会となるだけでなく、適切な性行動のための自己決定をする場面であることから、パートナーとのコミュニケーション能力を高め、性的自己決定能力を育む必要性があることを指摘している。このようなことから、性的なパートナーを持つことによって、性的自己決定が高まるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、現在、若者に求められている「性的自己決定」を測定するための尺度を作成し、性経験の有無が、性的自己決定に関係があるかどうかについて検討することを目的とする。なお、ここでは性的自己決定を①自分の性を自らで選択し享受すること（性の自己受容）②性に対してオープンな態度であり、他者と語り合えること（性の解放性）③性の健康や権利について把握し理解すること（性の健康と権利）④多様な性の在り

方を理解し受容すること（性の多様性）の側面から構成されるものとする。

方法

調査対象者 H県内の私立大学で、心理学に関連する授業を受講している学生のうち、無回答、記入漏れなどのあるものを除いた、女性60名（年齢： $\bar{X}=20.1$, $SD=1.24$ ）、男性57名（年齢： $\bar{X}=20.4$, $SD=1.26$ ）、合計117名（年齢： $\bar{X}=20.2$, $SD=1.25$ ）であり、回答率は64%（183名中117名）であった。

調査内容

1. 調査対象者の属性について

現在もしくは過去にパートナーを持つ人に対しては、デートDV（身体的・言語的・心理的暴力）の被害経験・加害経験があるかどうか（「ある」「ない」の二件法）について尋ねた。また、パートナーの有無に関係なく、性経験があるかどうか（「ある」「ない」の二件法）について尋ねた。

2. 性的自己決定尺度について

性的自己決定尺度の項目は、性に関する意識や行動に関する研究や調査で用いられた既存の尺度や文献、また、KJ法による情報収集により作成した。「性の自己受容」（例：自分自身のことを理解しているなど）、「性の多様性」（例：女だから男だからといわれることには抵抗感があるなど）、「性の健康と権利」（例：セックスの相手とエイズ・性感染症の予防について話し合うことができると思うなど）、「性に関する他者とのかかわり」（例：相手からの性的な誘いを断ることができないなど）の4つのカテゴリーに分類し、合計39項目を「性的自己決定尺度」とした。なお、回答は「あてはまらない（1）」～「あてはまる（5）」の5段階評定とした。

3. デートDVに対する自分の行動・態度について

作成した性的自己決定尺度に妥当性があるかどうかの検討を行うため、性的自己決定と関連していると考えられる「DVに対する行動・態度（以下、デートDV尺度）」（例：相手が、自分の意見に従わないとイライラしたり怒ったりするなど）を測定する尺度を用いた（山口，2004）。回答は「あてはまらない（1）」～「あてはまる（5）」の5段階評定とし、パートナーを持ったことがない調査対象者には、想像で回答してもらった。

手続き 2009年7月下旬、事前の授業を受け持つ教員へ調査依頼の旨を伝え、許可が得られた授業で質問紙を配布し、授業の初めもしくは終わりに実施した。なお、授業時間の関係により、授業中に実施できなかったところについては、質問紙を封筒に入れて配布し、自宅で回答してもらい、後日回収もしくは質問紙回収箱に投函してもらった。質問紙を配布する際に、調査内容について理解し、回答者の同意のもとで回答を行い、回答したくない項目があった場合は、無回答・無記入でもよいことを説明した。

結果と考察

1. 性的自己決定尺度の因子分析結果

まず、調査対象者の属性について、パートナーのいる（過去にパートナーがいるものを含む）女性は51名（85%）、男性は37名（65%）であり、その中でデートDVの被害経験があるものは、女性10名（20%）、男性4名（11%）、デートDV経験の加害経験があるものは、女性6名（12%）、男性3名（8%）であった。デートDVの被害経験、加害経験については、十分な人数が得られなかったため、今回の分析からは除外した。性経験があるものは、女性39名（65%）、男性25名（44%）であった。

次に、性的自己決定尺度39項目の平均値、標準偏差を算出し、天井効果およびフロア効果のみられた1項目（Q.4）を以降の分析から除外した。次に残りの38項目に対して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は、4.82, 3.63, 2.75, 2.01, 1.90, ...というものであり、性的自己決定の解釈として妥当であると考え

られる4因子とした。そこで、再度4因子構造を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行い、因子負荷量.400を基準として項目を取捨選択した。その結果、.400に満たなかった19項目を除外し、残りの19項目で最終の因子分析を行った(表1)。因子寄与率は37.40%であった。

表1 性的自己決定尺度の因子分析結果

項目内容	平均値 (SD)	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
8 性別は“女性”“男性”の2つでなくてもいいと思う	3.49 (1.42)	.717	.021	-.024	-.079
15 性的マイノリティの人のそのまを認めることができると思う	3.80 (1.12)	.670	.023	.144	.120
16 同性を好きになるのは異常なことである (R)	3.93 (1.19)	.662	-.214	-.033	.012
11 女だから男だからといわれることには抵抗感がある	3.38 (1.42)	.550	.047	.023	-.122
18 性的マイノリティの人が現実にかくさんいると困る (R)	2.85 (1.35)	.450	.109	-.279	.062
14 性的マイノリティの人がカミングアウトすることは望ましいことだと思う	3.58 (1.15)	.446	-.077	.072	.265
1 自分自身のことを理解している	3.43 (1.15)	.008	.803	.058	-.168
3 自分自身の身体を把握している	3.46 (1.15)	-.055	.764	-.096	-.010
2 自分の身体を大切にしている	3.37 (1.28)	-.134	.536	-.403	.301
5 “らしさ”ではなく“ありのまま”の自分を受け入れている	3.21 (1.23)	.145	.498	.326	-.058
24 エイズ・性感染症などのリスクから身を守るために情報を収集していると思う	2.83 (1.30)	.065	.428	.250	.014
33 自分が望んでいる性的刺激を与えてくれるように相手に頼むことができる	3.00 (1.23)	-.136	-.054	.701	.063
9 性についてオープンに話せる人がいる	3.68 (1.42)	.084	-.050	.566	.012
37 性的な嫌がらせをされた場合誰かに相談できる	3.50 (1.29)	-.043	.074	.523	.141
26 セックスの場面では相手任せになってしまうと思う (R)	3.02 (1.20)	-.269	-.164	.475	.116
38 性的なことについて自分とは異なる考え方を持っている人がいても認めることができる	4.11 (1.02)	.246	.101	.456	-.132
22 セックスの相手とエイズ・性感染症の予防について話し合うことができると思う	3.80 (1.25)	-.034	.172	.424	.355
25 いったい誰と性関係を持つか持たないかを自分の意志で決めることができると思う	3.97 (1.13)	-.048	-.008	.051	.700
28 女性が子どもを産むにせよ産まないにせよよく考えてから責任ある行動をとれると思う	3.97 (1.08)	.083	-.133	.026	.593

* (R) は逆転項目

因子間相関	I	II	III	IV
I	—	.04	-.07	.18
II		—	.21	.38
III			—	.10
IV				—

表1より、第1因子は6項目で構成されており、「性別は“女性”、“男性”の2つでなくてもいいと思う」、「性的マイノリティの人のそのまを認めることができると思う」、「同性を好きになるのは異常なことである(逆転項目)」など、性に対する多様な考え方や態度についての傾向がみられるため、「性の多様性」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「自分自身のことを理解している」、「自分自身の身体を把握している」、「自分の身体を大切にしている」などであり、自分自身と向き合い、受容している傾向がみられるため、「性の自己受容」因子と命名した。

第3因子は6項目で構成されており、「自分が望んでいる性的刺激を与えてくれるように相手に頼むことができる」、「性についてオープンに話せる人がいる」、「性的な嫌がらせをされた場合誰かに相談できる」など、性に関することにおいて、他者に対して解放的である傾向がみられるため、「性の解放性」因子と命名した。

第4因子は2項目で構成されており、「いったい誰と性関係を持つか持たないかを自分の意志で決めることができると思う」、「女性が子どもを産むにせよ産まないにせよよく考えてから責任ある行動をとれると思う」と、性の健康問題について、自分自身で決定している傾向がみられるため、「性の健康と権利」因子と命名した。

以上より、性的自己決定尺度は、「性の多様性」、「性の自己受容」、「性の解放性」、「性の健康と権利」の4因子構造となった。これは、当初から想定していた4因子構造と同様であり、性的自己決定には、このような4つの要素が大きく関係していると考えられる。

それぞれの下位尺度の信頼性について検討するため、内的整合性(α係数)による方法を用いて検討を行った。その結果、「性の多様性」α=.75、「性の自己受容」α=.74、「性の解放性」α=.70、「性の健康と権利」α=.58であり、

十分な信頼性は認められなかった。そのため、本尺度を性的自己決定尺度として使用するには、不十分であると考えられるため、下位尺度の項目を増やすなどして、精度を高めていく必要があるだろう。また、「性の健康と権利」の項目は2つであり、「性の自己受容」との相関が $r=.23$ 、「性の解放性」との相関が $r=.22$ と、弱い正の相関がみられた。このことから、本来「性の健康と権利」に含まれる項目だったものが、「性の自己受容」と「性の解放性」に分散したのではないかと考えられる。そのため、「性の健康と権利」因子が、独自の因子として成立するかどうかについても検討する必要があるだろう。

妥当性については、基準関連妥当性による方法を用いて検討を行った。その結果、性的自己決定尺度全体とデートDV尺度の相関は、 $r=.18$ であり、十分な妥当性は認められなかった。デートDV尺度と性的自己決定尺度の下位尺度である「性の健康と権利」の相関が $r=.31$ と正の相関がみられたことから、デートDV尺度は自分を守るために特化しているのに対し、性的自己決定尺度は、自分を守るだけでなく、他者の性の理解や自分の性意識、性行動への決定権を持っている、という多面的な構成となっているためではないかと考えられる。

2. 性経験の有無と性別による性的自己決定の差についての検討

性経験の有無による性的自己決定の差について検討を行うため、性的自己決定の各下位尺度とデートDV尺度について、性別×性経験の2要因分散分析を行った。その結果を表2に示す。

表2 性別×性経験の2要因分散分析の結果

	性経験	性別				主効果		交互作用
		女性		男性		性別	経験	
		平均	SD	平均	SD	F値	F値	
多 様 性	有	3.68	0.72	3.21	0.85	40.68 *	2.09	9.35 *
	無	4.30	0.55	2.99	0.75			
自 己 受 容	有	3.32	0.79	3.38	1.07	0.02	2.05	0.08
	無	3.13	0.63	3.11	0.82			
解 放 性	有	3.61	0.77	3.87	0.74	5.22 *	12.60 *	0.25
	無	3.03	0.76	3.43	0.76			
健康と権利	有	4.04	0.98	3.88	0.87	2.84	0.04	0.63
	無	4.21	0.70	3.77	1.05			
デートDV	有	3.99	0.64	4.10	0.56	0.03	0.26	0.74
	無	4.14	0.47	4.06	0.63			

* $p < .05$

表2より、「性の多様性」は、性別の主効果が有意であり ($F(1, 112) = 40.68, p = .000$)、男性より女性のほうが有意に高かった。また、交互作用も有意であり ($F(1, 112) = 9.35, p = .003$)、男女別に性経験の下位検定を行った結果、女性においてのみ有意であり、性経験のある女性より性経験のない女性のほうが有意に高かった ($F(1, 112) = 10.07, p = .002$)。性経験の有無別に性別の下位検定を行った結果、性経験有と性経験無の両方で有意であった。性経験のある男性より性経験のある女性のほうが、有意に高く ($F(1, 112) = 6.11, p = .015$)、性経験のない男性より性経験のない女性のほうが有意に高かった ($F(1, 112) = 40.55, p = .000$)。すなわち、女性、特に性経験のない女性のほうが、男性より多様性を重視していることが示された。性に対する意識や態度には、社会からの性役割期待とそれに結びついたステレオタイプが大きく影響しており、特に、男性優位社会のなかでは、男性に期待される役割を持った者同士が恋愛（愛情）関係にあるというのは非常に結びつきにくい（和田, 1996）、男性のほうが性の多様性の受容度が低いのではないかと考えられる。また、林（2007）の研究では、恋愛に対する態度が消極的であることとジェンダー・アイデンティティの低さに関係性があることが示唆されているが、その観点から本研究の結果を考察すれば、性経験のないものは、自己の性について、固定的な性役割にとら

われず、多面的な側面から捉えているためではないかと考えられる。そのため、性経験のない女性において、性の多様性を重視しているのではないかと考えられる。

「性の解放性」は、性別の主効果が有意であり ($F(1, 112) = 5.22, p = .024$)、女性より男性のほうが有意に高かった。また、性経験の主効果も有意であり ($F(1, 112) = 12.60, p = .001$)、性経験のないものより性経験のあるもののほうが有意に高かった。すなわち、男性のほうが性について解放的であり、性的な経験を持つ人のほうが解放的であると考えられる。解放性において、男性の方が高かったことは、高橋 (2003) が指摘するように、女性の場合、性に対する羞恥心やタブー意識による禁欲の必要性意識が、否定的セックス観に結びついており、性に対して解放的であることは恥ずかしいことであるといった意識やステレオタイプをもっているためではないかと考えられる。また、性経験を持つ人のほうが高かったのは、草野 (2006) や 臺・荒賀 (2006) の指摘するように、実際にパートナーを持つことで、コミュニケーション能力を高め、お互いに性的リスク対処への意識を促すことができるためではないかと考えられる。

以上の結果より、性的自己決定における性の多様性、性の解放性という点においては、性経験の有無が関連しているといえるだろう。性的自己決定を高めるために重要なことは、自己の性について、性役割にとらわれず、多面的な存在としてとらえ、性について他者と語り合える関係、理解しあえる関係を築いていくことが重要であると考えられる。

引用文献

- 青野篤子 (2006). 社会におけるジェンダーの病理 福富 護 (編) ジェンダー心理学 朝倉書店 pp.157-177.
- 臺 有桂・荒賀直子 (2006). 学生の性に関する情報へのニーズとその伝達経路 医療看護研究, 2, 89-94.
- 林 寛子 (2007). ジェンダー・アイデンティティと恋愛に対する態度 臨床教育心理学研究, 33, 59.
- 東 優子 (2008). HIV 感染への脆弱性とセクシュアル・ヘルス/ライツ 社会問題研究, 57, 27-39.
- 伊田広行 (2007). 「デート DV」をシングル単位的恋愛論と結びつけて伝える *SEXUALITY*, 32, 16-21.
- 今野洋子 (2003). 大学生の避妊に対する意識・行動に関する報告——A 大学の学生を対象とした調査報告——人間福祉研究, 6, 101-116.
- 石丸径一郎 (2004). 性的マイノリティにおける自尊心維持——他者からの受容感という観点から——心理学研究, 75, 191-198.
- 石丸径一郎 (2008). 異性愛者がレズビアン・ゲイ・バイセクシュアルに対して抱いているイメージ 同性愛者における他者からの拒絶と受容——ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ——ミネルヴァ書房 pp.41-60.
- 小泉奈央・吉武久美子 (2008). 青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査 純心現代福祉研究, 12, 61-75.
- 草野いづみ (2006). 大学生の性的自己意識、性的リスク対処意識と性交経験との関係 青年心理学研究, 18, 41-50.
- 中里見博 (2007). ポスト・ジェンダー期の女性の性売買——性に関する人権の再定義——社会科学研究, 58, 39-69.
- 沼崎一郎 (2000). 男性にとってのリプロダクティブ・ヘルス/ライツ——〈産ませる性〉の義務と権利——国立婦人教育会館研究紀要, 4, 15-23.
- 曾我部美恵子・大井けい子・岸 恵美子・早川有子・高村寿子 (2000). 人工妊娠中絶を決定するまでの経緯と心理的变化 日本女性心身医学会雑誌, 5, 190-196.

- 杉山貴士 (2006). 性的違和を抱える高校生の自己形成過程——学校文化の持つジェンダー規範・同性愛嫌悪再生産の視点から—— 技術マネジメント研究, 5, 67-79.
- 忠津佐和代・梶原京子・篠原ひとみ・長尾憲樹・進藤貴子・新山悦子・高谷知美 (2008). 大学生の性に関する認識の実態とピアカウンセリングへの期待——ピアによる性教育ニーズと教育内容の検討—— 川崎医療福祉学会誌, 17, 313-331.
- 高橋久美子 (2003). 親の性意識が性教育に及ぼす影響——父親と母親のセックス観をもとに—— 日本家政学会誌, 54, 59-67.
- 柘植あづみ (2000). 女性の人権としてのリプロダクティブ・ヘルス/ライツ 国立婦人教育会館研究紀要, 4, 9-14.
- 上野淳子 (2008). セクシュアリティ 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.149-166.
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度——性および性役割同一性による差異—— 社会心理学研究, 12, 9-19.
- 山口のり子 (2004). 愛する, 愛される——デートDVをなくす若者のためのレッスン7—— 梨の木舎

The effect of sexual experience on sexual self-determination

Ayumi Tahara

The purpose of this study was to construct a sexual self-determination scale and examine the effect of sex experience on sexual self-determination. A questionnaire which included items on sexual experience and dating violence, and sexual self-determination scale was administered to 117 university students as a part of the requirement of a social psychology course. Sexual self-determination was found to be constructed from four factors: sexual diversity, sexual self-receptiveness, sexual liberty, and sexual health/rights. However, both the reliability based on alpha coefficients and the criterion-related validity were not sufficient. It was found that women without sexual experience are able to recognize sexual diversity. In addition, men were found to be more sexually liberated than women, and those who had had sexual experience were more sexually liberated than their counterparts.

(指導教員：青野篤子)